

OH PRIMULA SIEBOLDII SAKURASOH PRIMULA SIEBOLDII SAKURASOH PRIMULA SIEBO
LDII SAKURASOH
OH PRIMULA SIEBOLDII SAKURASOH PRIMULA SIEBOLDII SAKURASOH
LDII SAKURASOH

さくらそう通信

2号
1995.11.10



田島ヶ原のサクラソウ自生地（平成7年4月）



埼玉さくらそう会の概史

竹花芳男

昭和31年6月、浦和市在住の岡田実氏の呼びかけで、山野草の愛好家の集りで埼玉山草会を設立し、山野草の栽培と研究をモットーに盛んに活動をされていましたが、ある一部の人から「園芸種さくらそうは優雅な花で美しいが、いわゆる山草とはいささか趣が異なるのではないか」という意見がでて、さくらそうを専門に栽培、研究する会をつくらうと言うことで有志が集り昭和42年2月28日、日本さくらそう同好会が設立され、初代会長に故松井計郎氏が就任し、活動を開始したのが現在の埼玉さくらそう会の始まりとなった訳であります。此のことについて先輩格の「東京さくらそう会」では、当時の機関紙で、「さくらそうの本場（本家）は、こちら」とい

うことを伝えていました。浦和としてはいささか遅れをとった感じがあり、さくらそう界発展のためには愛好者が増えることはこの上もない喜びであると云うことで、会員勧誘に努力してまいりました。会の役員構成は、花界の大御所松井計郎氏を始めとし、幹部に近藤米吉氏、菅沼満氏、岡村正雄氏（現会長）、太田森五郎氏と、その道の知名人から編成されており、以来今日まで設立の理念を忘れることなく今に伝えられてきました。現在会員数は310名を数え、保有品種も約300種となっており、その発展振りを知ることができます。しかしこれまで幾多の難題と苦労は大変なものがあり、例えば、展示会一つ見ても昭和45年4月には埼玉会館、昭和46年4月には別

所沼県立美術館と転々とし、昭和47年4月から玉蔵院会場になって以来、現在に至っている訳であります。今日のさくら草の発展を見るに至った基礎的な要因は、役員や会員の協力と努力もさることながら、故松井会長の主幹力に負うものが多く、忘れられないことがあります。月日のたつものは早いもので、埼玉さくら草会も通算創立30周年を迎えることとなります。思い出の多い30年ではないかと思っております。昭和56年11月には、埼玉県の「シラコバト賞」の受賞などがあり、大いに喜びを感じたことでした。本年も前述した通り、設立当時想像もしなかった会員の増加現象等があり、会の近代化とサービスの充実が急務ということの一つとして、

平成元年より埼玉さくら草同好会を解消して埼玉さくら草会と改め、更に充実した活動を展開してゆく所存しております。
(埼玉さくら草会副会長)



園芸種「三保の古事」
(竹花氏作、写真提供も同氏)

さくら草と私

私がさくら草に関心を持ったのは、昭和37年4月浦和市のさくら草まつりが田島ヶ原の原野で行われたときである。河川敷といっても民有地であり、そこを借りてのレクリエーション行事であった。草ぼうぼうの中に点々と桃色のさくら草が咲いていた。中学のとき以来、生物に興味を持った私は植物の観察に夢中となり、村越三千男編の日本植物図鑑を片手によく野山を歩いた。しかし不思議とさくら草には出会わなかったし、関心もなかった。田島ヶ原のまつりは以後数年の間、用地買収や公園整備のため、会場を別所沼公園に移して行われた。さくら草の開花を愛でてのまつりにはさくら草がなくてはならないものだった。当時、埼玉山草会の会長さんだった岡田実先生（故人）がさくら草の園芸種を沢山お持ちで、それを別所沼公園の美術館に展示して下さいました。野生のさくら草からこんなに多くの園芸品種が出来たのかとえらく感心したものだ。以来、山草会、後に分かれてさくら草会に入れてもらい苗を



昭和47年 さくら草まつりでの展示
(写真提供 浦和市広報広聴課)

石井正夫

いただいたり、見学会などに参加したりして興味を募らせた。自分だけで野山に出かけるときも、さくら草の自生しているような湿地や河川流域を中心に歩くようになった。昔は荒川流域には至る所に自生していたというが、今は、田島ヶ原以外では桶川と朝霞の一部でしか見られない。

私の歩いた赤城、那須、軽井沢、野辺山などいづれでも咲いてくれることが。

浦和のさくら草の行政との係わり合いは、昭和29年にNHKが郷土の花として選定して以来、実質県の花として親しまれており、昭和46年に埼玉百年の記念事業に正式に県花となった。翌47年に浦和でも市花に制定した。以来、県や市では品種パンフレット等で紹介したり、品種の保存、栽培を行うなど力を入れており、特に浦和では花のデザイン使用の他、品評会、展示会をまつりと併せて実施しており、市民はもとより遠方からも花を見に、苗を求めに会場は賑わっている。係わり合いの中で最もユニークなのは、国際さくら草研究センター構想であろう。浦和市が他に類を見ない植物の一分野の研究機関を設置しようとするころみは、その筋の専門家は勿論、一般の人々からも注目的となると思う。かつてアメリカでプリムラ属（サクラソウ属）の国際会議が行われたことがあり、浦和からも参加したことは聞いているが、さくら草のメッカとして世界に名が知られることは画期的なことと思う。造るにあたっては施設、場所等色々大変だと思うが世界中のさくら草が浦和で一堂に会して見られるのはいつの日になるか。かつて岡田先生も言っておられたことだが楽しみである。

(浦和市役所都市計画部参事)

田島ケ原のサクラソウ

小杉 昭光

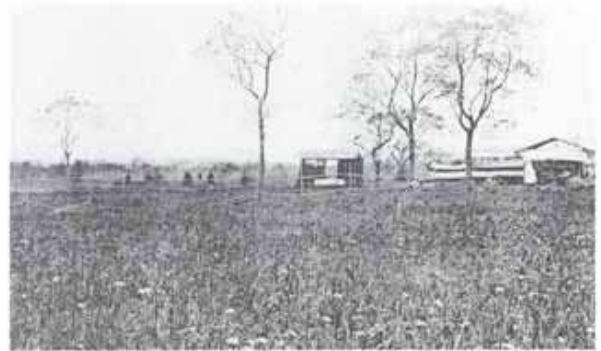
私が初めて田島ケ原をおとづれ、サクラソウを見たのはざっと60年余り前のことで、小学校の低学年の遠足の時であったと思う。サクラソウの花盛りの田島ケ原は、子供心にも大変綺麗な原っぱという印象を受けたことを覚えている。

サクラソウは日本をはじめ朝鮮半島、中国、東シベリアなどに分布し、やや湿りけの多い草原などに生ずる多年草で、日本では北海道南部から本州、九州に分布している。

ソクラソウの自生地はあちこちに点在するが本県の荒川沿岸の地には多く、現在国の特別天然記念物に指定されている浦和市の田島ケ原のほか、かつてはその下流の浮間ケ原や戸田ケ原、上流の錦ケ原など川沿いの地に点々と存在していた。

なかでも浮間ケ原や戸田ケ原は江戸時代の中頃から多くの人々に知られ、元禄、文化、文政の頃江戸を中心にしてサクラソウの栽培が盛んになるや、これらの地の野生種をもとに300とも400ともいわれるさまざまな園芸品種が作り出されたのである。サクラソウはもともと花弁の色や形などに変異が多く、それらの遺伝的性質を巧みに利用した江戸時代の人々の努力の結晶として、優れた園芸品種が出現したと言ってよいだろう。

各地の人里近くのサクラソウの自生地は、近年都市の発達に伴い開発やその他さまざまな事が原因で次第に消滅の道をたどり、現在荒川沿岸の自生地は僅かに浦和市の田島ケ原のみとなってしまった。田



昭和9年 田島ケ原サクラソウ自生地
(写真提供 浦和市政管理課)

島ケ原は国の特別天然記念物に指定され、関係者の熱心な保護活動が続けられているが、今後周辺地域の開発が進めば進むほど今まで以上にいろいろな角度からの研究と、その成果にもとづく保護保存の努力が必要になってくると思われる。

サクラソウを中心にそれといるいろいろな関わりをもちながら生活している植物や動物の一群をまとめて(生態系を)保護する事は、言うはやさしく行うは難しい問題である。しかしサクラソウに限らずそこに見られる植物や動物は、いずれもその地域の地形や気候の変動という地球の歴史と、人間の活動や生物自体の進化と適応の歴史の結果として存在しているもので、貴重な文化的遺産であると共に我々の大切な環境の構成要素である。我々にはこれらを次の世代に伝えていかねばならない責任のあることを忘れてはならない。

(浦和市文化財保護審議会委員)

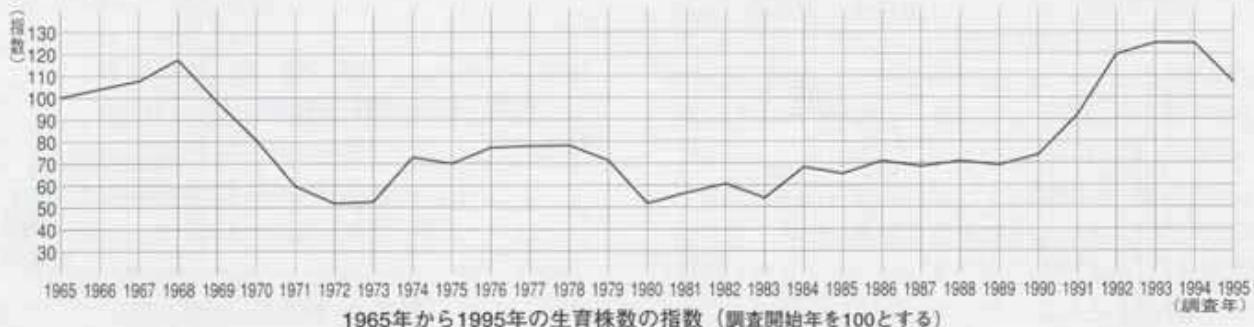
サクラソウ自生地株数、開花状況調査について

浦和市文化財保護課副主幹 高山 清司

田島ケ原のサクラソウの株数調査は、昭和40年より毎年4月中旬、サクラソウの開花に合わせて行ってきています。その結果が下の表です。調査は開始された昭和40年から磯田洋二先生を中心に行って来ました。その方法は、自生地内に設けた10m×10m調査枠内を1m四方に区切り、そこにある株が幾株か、そのうちどれだけの花が咲いているのかを二人一組になって数え、それを集計します。調査区によって粗密がありますが、サクラソウの密集しているところでは、カウントにもなかなか苦勞するような状況です。そして当初設けた11か所を今日まで定点観測をしております。



自生地における生育状況調査



ヘルドさんのSAKURASOH

青木 義 脩

私は、ヘルドさんという人の顔を知っているわけではない。しかし、会ったことはあるはずである。ヘルドさん (Mr. Paul Held) は、アメリカはコネチカット州に住む小学校の美術の先生である。彼は、アメリカサクラソウ協会 (The American Sakurasoh Association) という会を、昨年 (1994) 頃つくった。ところで、アメリカなどでは、サクラソウ属の植物の園芸家の間では、Sakurasohといえ、日本で一般に行われている園芸 (展示) 用サクラソウのことと思えば良い。サクラソウ属の他の植物は含まず、Primula sieboldii (サクラソウ—いわゆる日本さくら草) のみである。アメリカ国内でもこのSakurasohの関心は高い。1992年4月、オレゴン州ビーバートンで開かれたサクラソウ国際シンポジウム (The Primula Worldwide Symposium) に私も出席することができたが、その時、浦和市の田島ヶ原サクラソウ自生地の紹介コーナーを作らせて頂いたところ、多くの参加者からPrimula sieboldiiかと尋ねられるほどであった。この会に、ヘルドさんも出席していたことが、後にわかった。

それでも途方にくれるばかりであった。そこで、埼玉さくらそう会の幹部の方に相談したところ、何とか工夫をして頂けるということであった。私は、そのことをヘルドさんに伝え、さらに日本では普通、芽分けが主で種を採取することはほとんどないことを伝えた。ヘルドさんは、婦人の大祖母ゆかりのロックガーデンにサクラソウがあるのを見、それを自宅に持ち帰り、そのすばらしさに魅せられ、以後、各方面から種子を取り寄せ、交配で生じたものも含め、250以上の異った個体を持つに至ったということである。そして彼のロックガーデンには、色とりどりのサクラソウが所狭ましとばかり生育しているのである。そのことを示す写真が他日、送られて来た。地植えでの群落は壮観だし、色々の差異もよくわかる。さきに埼玉さくらそう会にお願いした種子は、丹下文雄会員が採取されたものを、昨秋送付した。ヘルドさんは、次に、サクラソウの品種名の登録制度について関心をもたれている。サクラソウの名称の国際化もいずれ直面する問題であろうと門外の者ながら感じている。



ヘルドさんの庭のサクラソウ
(写真提供 Mr. Paul Held)

約2年後、ヘルドさんから私のもとに来信があり、日本の園芸用サクラソウの種子と自分のものを交換したいという内容であった。その頃、ヘルドさんは、すでに250余の異なるSakurasohをコネチカットの自分の庭に持っていたようである。私は、サクラソウの鉢10個前後しか持っていないし、とても品評会に出せるようなことをしていないし、種子といわ

ヘルドさんは、日本からの協力を期待しているようである。浦和に来て田島ヶ原を見たいと何度も書いて来ている。コネチカットに住む1人がサクラソウの普及に情熱を燃やしていることに敬意を表するとともに、サクラソウの原種の自生地を保護している浦和市を誇らしく思う次第である。

(浦和市教育委員会文化財保護課長)



さくらそう通信

平成7年11月10日

編集・発行 浦和市教育委員会

浦和市常盤6-4-4

☎048-829-1796

印刷 関東図書株式会社



題字 教育長 浅見 匡